

# 近代における瓦産地の地域差と地域的拡大 —愛知県碧海郡と西加茂郡の事例—

高木 秀和

## I はじめに

本稿の目的は、日本を代表する瓦産地である愛知県を事例に、近代における県内の瓦産地の分布をみたのち、その地域差を考察し、瓦生産の中心地である三州瓦を生産する碧海郡と隣接する瓦産地である西加茂郡を事例に、瓦産地の地域的拡大という観点から両地域の関係を明らかにすることである。

日本三大瓦のひとつである三州瓦生産地域の研究には、産地の風土をベースとしながらそれに関連する技術と産業構造の変容をもとに日本における瓦主産地としての地位が築かれるまでの過程を論じた宮川(1995)や、瓦以外も含め窯業がさかんな東海地方を技術史の観点から概観した中部産業遺産研究会(2000)などがある。また、瓦を製造してきた西三河の自治体では、各自治体史や概説書(高浜市やきものの里かわら美術館2010)のほか、近世から近代にかけての三州瓦産地の歴史的展開をまとめた郷土史家の杉浦茂治氏(高浜町誌編纂委員会1968)(以下、杉浦1968とする)や林口宏氏(碧南市教育委員会2021)の研究などがある。筆者も、現代の高浜市を事例に、市外から転入した集団就職、炭鉱離職者や、季節労働者たちが三州瓦産地を担ってきたことを論じた(高木2019;高木2021)。一方、若子旭氏(2009)は挙母町(現・豊田市)でもさかんに製造されていた瓦に関する統計資料を時期別に整理し、「忘れ去られた」当地の瓦生産の盛衰を把握できるようになった。

しかし、愛知県全体のなかに三州瓦産地を位置づけながら、県内各地にみられる産地との地域差を考察したり、碧海郡と県内の他の瓦産地間の関係を論じることは、これまであまり行われてこなかった。

そこで本稿は、まず近代における愛知県内の瓦産地の分布を確認し、県内瓦産地の地域差を考察する。それをうけ、前述の作業で浮上してきた瓦産地のなかで、これまで個別に論じられることが多かった碧海郡と西加茂郡の瓦産地間の関係を、瓦産地の地域的拡大という観点から論じることにする。

## II 愛知県における瓦産地の分布

日本三大瓦のひとつである三州瓦の生産地を擁する愛知県は、近代以降にその生産量を大きく伸ばし、三州瓦は東京をはじめ全国へ販路を広げていった。『日本瓦業総覧』（1927）所収の「全国三府四十三県其他、台、北、鮮、満 製瓦事業統計表」によると、総製造戸数 12,732 戸、総生産額 52,552,911 円のうち、淡路瓦を生産する兵庫県が 1,308 戸、5,861,759 円でトップであり、愛知県（806 戸、3,463,357 円）がそれに続いた。

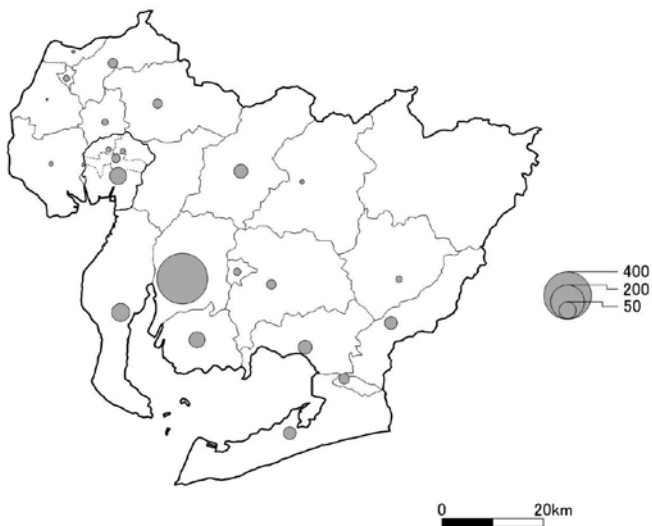


図1 愛知県市郡別瓦製造・販売事業者の分布（1926年5月）  
資料：『日本瓦業総覧』（1927）により作成。

近代における瓦産地の地域差と地域的拡大  
 —愛知県碧海郡と西加茂郡の事例—

図1は『日本瓦業総覧』（1927）所収の「愛知県瓦営業者（大正十五年五月現在）」をもとに、1926年5月時点に瓦の製造または販売を手がけていた事業者の分布を市郡別にみたものである。それによると、県内では愛知県と北設楽郡を除く市郡にひろく分布しており、尾張地方より三河地方に多いことがうかがえる。総数857事業者のうち、とりわけ西三河南部の碧海郡が450と突出しており、その西に位置する知多郡の55、知多郡と接する名古屋市南区の53のほか、碧海郡の南と北に位置する幡豆郡43や西加茂郡33などもやや目立っている。名古屋市南区では、うち45が製造を行い、台地に位置する笠寺に28が集まっていた。また、東三河でも広範囲に分布しており、東三河南部の豊橋市、渥美郡、宝飯郡、八名郡を合わせると110となる。

このような地域差は明治時代中期にはみられたと考えられ、『尾参宝鑑』

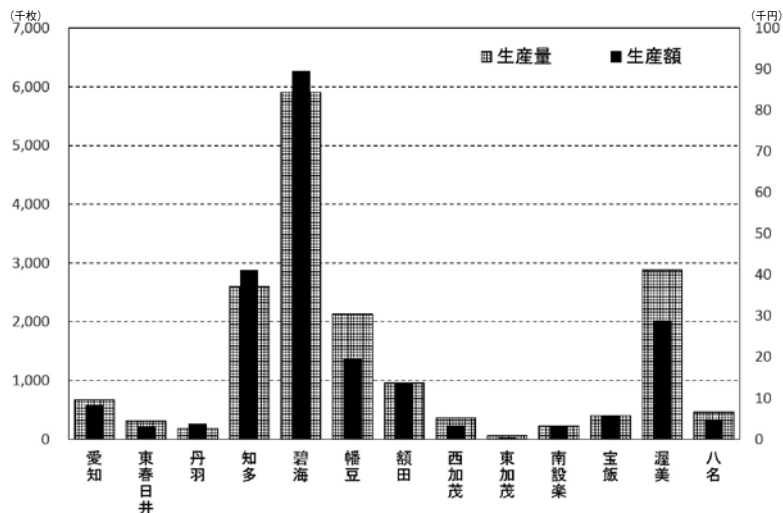


図2 愛知県内郡別瓦生産量・生産額（明治時代中期）（単位：千枚、千円）

注1 名古屋市（1889年市制施行）は計上されていない。

注2 当時は、豊橋市（1906年）、岡崎市（1916年）の市制施行前であり、既成市街地は渥美郡豊橋町、額田郡岡崎町に位置した。

資料：『尾参宝鑑』（1897）により作成。

(1897)により当時の県内郡別瓦の生産量と生産額を確認すると、県内総生産量1714万枚余り、総生産額およそ22万円のうち、碧海郡が590万枚余り、およそ9万円を占め、それに隣接する知多郡は260万枚、約4万円、幡豆郡213万枚余り、約2万円であった(図2)。しかし、笠寺村を含む愛知郡は67万枚余り、約0.8万円、西加茂郡36万枚余り、約0.3万円であり、この時点では西加茂郡はそれほど目立った存在ではなかった。一方、当時は豊橋市の市制施行(1906)前であり、豊橋町を含む渥美郡の288万枚、およそ3万円をはじめ、八名郡や宝飯郡でも瓦が製造されていた。

前出の図1から販売業者のみを抽出してみると、総数は52事業者と多くはないものの、尾張地方に偏在していたことが分かる(図3)。そのうち名古屋市中区、西区、東区は事業者の全数が販売を行っており、製造は皆無である。名古屋市南区では、うち8が販売に従事し、熱田とその周辺に



図3 愛知県市郡別瓦販売事業者の分布(1926年5月)

注 1点1事業者である。

資料:『日本瓦業総覧』(1927)により作成。

近代における瓦産地の地域差と地域的拡大  
—愛知県碧海郡と西加茂郡の事例—

住所を有しているケースが目立つ。さらに、名古屋市に隣接する西春日井郡や海部郡のほか、中島郡（起村）、葉栗郡（葉栗村）ではすべてが販売に携わっていた。一方、三河地方では豊橋市に2の販売事業者がみられ、ともに当時の既成市街地のうち豊川河岸の近くに立地している。以上のことから、尾張地方の販売事業者は名古屋市とその周辺地域の需要に応えるとともに、広域的な流通にも関わっていたことが考えられる。

別の見方をすれば、尾張地方は一部を除けば瓦の生産よりも販売が主体であり、三河地方のなかでも碧海郡とその周辺地域を愛知県の代表的な瓦産地とみなすことができる。

### Ⅲ 県内瓦産地の地域差

瓦を製造は、まず原土の採掘から始まり、原土を練って荒地と呼ばれる素地を作る。この原土の種類と土づくりが瓦の品質を左右する要因のひとつとなる。

『日本瓦業総覧』（1927）によると、碧海郡では原土を田畑の下より採取し、品質は「極めて良質」であり、粘度が高いという。知多郡では「畑土」と「山土」があり、品質は「良質」であるとし、碧海郡と知多郡東浦村の一部では原土を半年から一年（後者は半年）ほど寝かす。その理由は、碧海郡では「アクぬき」や「粘土をなら」すためだという（杉浦 1968）。また、名古屋市付近の畑、幡豆郡の田または畑、西加茂郡の山または畑の土も「良質」「良好」であり、なかでも西加茂郡拳母町土橋（現・豊田市）の「山土」は「最も良質」であると評している。なお、東三河地方については原土の評価が記されていない。

なかでも碧海郡を中心とする地域で採掘される原土は「三河土」と呼ばれ、宮川（1995）によると陶磁器用粘土には適さないが大量にあり、窯業地域の間で原土の競合がないことが有利な条件となった。小野（2018）によると、三河土が産出される西三河南部は、更新世に形成された碧海面に

ほぼ相当し、泥と砂の互層からなる。また、西加茂郡拳母町付近には拳母面が広がり、地表面は赤色で、その下は風化の進んだ砂や砂礫層から構成され、前述の土橋付近に位置するトヨタ自動車元町工場の地下では比較的軟弱な砂やシルトが目立つ。このことから、碧海面と拳母面から採掘される「良質」な原土の性質は異なることがうかがえる。

荒地は瓦のかたち成形後、表面を磨いて乾燥させ、白地瓦を作る。そして瓦が十分乾燥したら窯入れを行う。『日本瓦業総覧』(1927)によると、碧海郡における瓦生産費の割合は、燃料 38.3%、工賃 38.0%、原料 17.5%、その他 6.2% であり、焼成にかかる燃料の割合が最も多くを占めた。したがって、原料とともに燃料も瓦産地の立地を規定する重要な条件となる。愛知県内では燃料として石炭および松木または松木葉が使われることが多く、ほとんどの市郡では 1 基、1000 枚あたりの焼成時間が 10 時間のところ、碧海郡は 8～11 時間とバラつきがあったことが分かり、燃料費も同様にバラつきがあり、他の市郡に比べて若干多くかかっているケースもみられる。このように、燃料の観点から碧海郡をみると、若干の優位性がみられることもあったが、燃焼時間、燃料費ともにやや劣っていたケースもみられた。

以上のことから、碧海郡は燃料については不利な点もあったが、他の市郡との間には大きな差異は認められない一方、原土の品質面では「三河土」としての優位性があり、北接する西加茂郡でも「良質」な原土が得られることが分かり、両郡は段丘や台地から原土が供給されるという共通性が認められる。これまでの検討から、燃料よりも原料である原土が瓦産地の地域差を生む大きな要因であると考えられることから、本稿では碧海郡と同郡に接する西加茂郡を原料指向型工業である瓦産地ととらえることとする。両郡は、現在では南から碧南、高浜、安城、刈谷、知立、豊田の各市に該当する。

図 4 は前出の図 1 から両郡とともに、東接する岡崎市と東加茂郡松平村、

近代における瓦産地の地域差と地域的拡大  
—愛知県碧海郡と西加茂郡の事例—

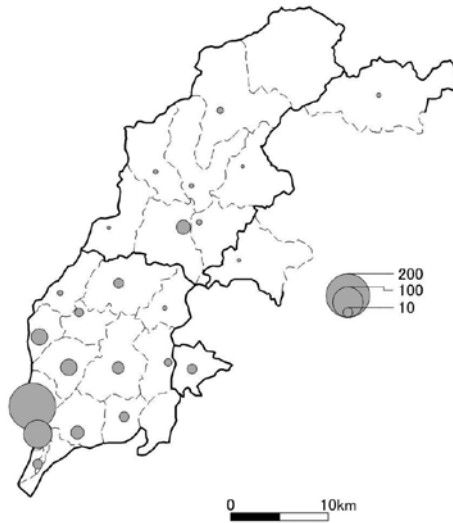


図4 西三河における市町別瓦販売事業者の分布（1926年5月）  
資料：『日本瓦業総覧』（1927）により作成。

旭村（現・豊田市）の瓦製造事業者を加えて町村単位で抽出したものである。同図によると、高浜町（現・高浜市）が227で碧海郡全体の450の半数を占め、新川町（現・碧南市）の84とともに核心的な地域を形成している。この地域のなかでは広範囲に瓦製造事業者が分布していることが読み取れるが、20以上の市町は碧海郡依佐美村（現・安城市、刈谷市）29、刈谷町（現・刈谷市）27と、西加茂郡拳母町（現・豊田市）20であり、やや目立っている。

宇佐見（2008）によると、現在の安城市域では明治用水通水以前は豊富な原土を用いた瓦生産をはじめとする窯業が農家の副業として普及し、明治時代後期には繊維業と並ぶ工業の中心的存在であった。しかし、その後は生糸の生産が伸びた一方、瓦生産は大正中期以降減少し、同氏が昭和期には「見る影もなくなってしまう」と評すほど衰退した。しかし、戦後以降も瓦を含む土石製品の生産は続き、1955年時点の安城市内には粘土瓦を製造する企業が15あり、その他日用土器の生産も目立ち、企業数では土

石製品は紡織製品に次ぐ位置にあった（北川 2008）。

一方、平成合併前の豊田市域でも原土に恵まれ、原土とともに燃料となる松葉や松木も入手することができた（豊田市近代の産業とくらし発見館 2017）。瓦製造事業者は、拳母面を水源とする逢妻男川（境川水系）沿いの段丘上に位置する拳母町土橋周辺から碧海郡高岡村にかけて多く分布していたが、昭和 30 年代にはトヨタを中心とする工業化や都市化の進展により産地が崩壊していったとされる（宮川 1977）。豊田市内では 1981 年まで窯に火が入れられ瓦が製造された（豊田市近代の産業とくらし発見館 2017）。

#### IV 近代における瓦産地の地域的拡大

これまで述べてきたように、原土は瓦産地の立地を規定する大きな要因であり、碧海面と拳母面ではその性質が異なっていた。碧海郡高岡村で採掘された原土が高浜や碧南方面にも供給されていた事例が報告されているように（天野 2015）、瓦生産の周辺地域で採掘された原料がその中心地へ運ばれたこともあった。それだけではなく、原料を求めて碧南や高浜方面から平成合併前の豊田市域へ移住する瓦職人もみられた（豊田市近代の産業とくらし発見館 2017）。宮川（1977）は、碧南から事業拡大と親族の存在により移住した土橋の瓦製造事業者（1923 年創業）の事例を紹介している。

その結果、大正期の西加茂郡では瓦生産額が大きく増加し、『西加茂郡史』（1926）によると 1912（大正元）年に約 3.3 万円だった生産額が、1919 年には約 16.9 万円を記録したほどであった。そして、『日本瓦業総覧』（1927）では拳母町の 20 の瓦製造事業者がみられ、碧海郡高岡村でも 9 事業者が記録されている（図 4 参照）。

瓦職人の移動をめぐっては、近世から三河から信濃や美濃をはじめ各地へ渡る「瓦師」が知られており、杉浦（1968）では明治初期の史料を用い



近代における瓦産地の地域差と地域的拡大  
—愛知県碧海郡と西加茂郡の事例—

表1 挙母町（現・豊田市）におけるおもな瓦製造者

No.	総覧	計画	市史	逢妻	所在地	出身地	創業年	他の創業年
	1926	1953	1981	2001				
1	○	○	○	○	寿町	高浜	1902	計画は1925
2	○	△	○	○	寿町	高浜	1903	計画は1940
3	○		○	○	寿町	高浜	1903	
4		○	○	○	寿町	笠寺	1907	計画は1929
5	○	○	○		下市場町	豊田	1919	計画は1922
6	○	△	○		下市場町		1921	
7	○	○	○	○	寿町	高浜	1922	1921（注8）
8		○	○	○	寿町	高浜	1922	市史・逢妻は1932
9	○	○	○		土橋町	碧南	1923	
10	○	○	○	○	寿町	平坂	1924	計画は1932
11		○	○		寿町	碧南	1924	市史は1925
12	○	○	○	○	寿町	碧南	1925	計画は1933
13	○	○	○		深田町	安城	1925	
14	○			○	寿町	碧南	1925	
15		○	○	○	寿町	碧南	1946	計画は1949
16		○	○	○	緑ヶ丘	岡崎	1946	
17		○	○	○	緑ヶ丘	豊田	1947	市史・逢妻は1951
18		△	○	○	寿町	豊田	1947	
19		△	○	○	緑ヶ丘		1947	
20			○	○	緑ヶ丘	豊田	1948	1953（注8）
21		△	○	○	緑ヶ丘	高浜	1949	市史・逢妻は1952
22		○	○	○	寿町		1949	
23			○	○	寿町	碧南		
24			○	○	緑ヶ丘	碧南		

注1 No. は創業年が古い順、同年の場合は典拠となる文献が多い順に並べた。

注2 所在地、出身地は、笠寺（現・名古屋市南区）、平坂（現・西尾市）を除き、現在の地名。

注3 総覧、計画、市史、逢妻は資料の文献を略記したもの。年号は発行年。

注4 『挙母都市計画』（挙母市役所、1953）は未見。若子旭氏が同資料をもとに作成した表を参照した。

注5 『あいつまの人物誌』は永田和之氏（寿町）による『東田の生い立ち』（1997）を参考にしている。筆者未見。

注6 ○印は該当文献に記載があるもの、△は同一人物と考えられるもの。

注7 出身地と創業年の空欄は、文献に「不明」とあるか空欄のもの。

注8 『とよたの製瓦業 いぶしの輝き』（2017）による（No.7、20）。

資料：『日本瓦業総覧』（1927）、若子（2009）、『豊田市史9 資料 現代』（1981）、『あいつまの人物誌』（2001）により作成。

て彼らの年齢や移動先などがまとめられている。こうした流れもあり、彼らが碧海郡から「良質」な原土を求めて西加茂郡挙母町へ移住したものと考えられる。

表1は『日本瓦業総覧』（1927）、「挙母都市計画」（挙母市役所 1953）、『豊田市史9 資料 現代』（1981）、『あいづまの人物誌』（2001）をもとに、正確さを期すためにこれらのうち二点以上の文献に記載がある挙母町内の瓦製造事業者の所在地、出身地、創業年をまとめたものである。そのため実際にはさらに多くの瓦生産に携わる者がおり、さらに多くの資料を参照すればより正確な表を作成することができるものと思われる。なお、「挙母都市計画」は未見であり、若子氏の研究（2009）を参照した。

この表によると、所在地は挙母面に位置する現在の豊田市寿町が最も多く、隣接する緑ヶ丘も目立ち、挙母市街地（当時）に接する下市場町にも立地した。出身地は碧南と高浜が目立ち、岡崎、安城、平坂（現・西尾市）、笠寺からの移住者もみられた。平成合併前の豊田市域を移動したケースも散見され、なかには碧海郡から移住後、再移動したケースがあることも考えられる。創業年は文献により異なることが多く正確さに欠けるが、参照した四点の資料の中で最も古い創業年を採用すると、明治時代後期、大正時代の後半、昭和戦後期に分類することができ、とくに大正後期に碧南や高浜方面からの移住者が多かったことがうかがえる。

ところで、表1のNo.13は寿町や緑ヶ丘を含む東田自治区にも近い深田町（深田山自治区）で瓦製造を行ってきた。『あいづまの人物誌』（2001）によると、同氏（1889年生）は少年時代に依佐美村高棚の瓦職人のもとで十年間修業したのち、長野県南安曇郡へ渡って瓦職人として研鑽を積んだ。『深田山農事実行組合 八十年の歩み』（2009）には、1919年に当地の土地を取得し、碧海郡依佐美村高棚から通いながら開墾事業を行い、1929（昭和4）年に家族とともに移住したという家族史が記録されている。

「深田山開墾地概要」（愛知県西加茂郡深田山耕地整理組合、発行年不明、

近代における瓦産地の地域差と地域的拡大  
—愛知県碧海郡と西加茂郡の事例—

『深田山農事実行組合 八十年の歩み』所収)によると、碧海郡では明治用水の開通(本流は1880年)により開墾が進展し、明治から大正に時代が変わる頃には耕地が狭く感じられるほどであった。第一次世界大戦の大戦景気により土地開墾が旺盛に行われるようになると、依佐美村高棚を中心とする13名が豊橋市の地主から深田山の土地を買収し(1918年)、開墾事業に着手した。その後も高棚などからの入植者が続き、1935年には深田山自治区として独立することになる。

『深田山農事実行組合 八十年の歩み』(2009)に寄せられた手記からは、表1のNo.13以外にも碧海郡からの入植者の歴史を断片的に知ることができる。例えば、1931年に高浜町から入植したA氏は1939年まで深田山で鬼師(鬼瓦職人)をしており、B氏は依佐美村高棚出身で青年期には高浜で瓦職人をしていた(ただし深田山へ入植後は農業に従事)。また、C氏の父は依佐美村の尋常小学校で教員をしており、その教え子の多くが深田山に入植したために誘いを受け、四男であるC氏が送り出されたという。

以上の限られた事例から、瓦生産の中心地である碧南や高浜から、ダイレクトに挙母町に移住して瓦生産を行っただけではなく、その間に依佐美村高棚が介在し、両者を結ぶ役割を果たしていたケースもみられることが明らかとなった。その際、碧海郡で青年期を過ごした男性のなかには、郡内の碧南・高浜や高棚で修業後、瓦職人兼農業開拓者として独立するために挙母町へ移住したケースもあることが考えられる。ただし、本事例はサンプル数が少ないうえ、挙母町の瓦生産の中心地であった東田自治区(寿町、緑ヶ丘)に近い深田山自治区の限られた事例であることから、直ちに一般化することは困難である。

## V おわりに

本稿は、日本三大瓦と呼ばれる三州瓦を生産する愛知県における近代の瓦産地の分布をみたのち、瓦生産の地域差を考察した。それをうけ、愛知

県の瓦生産の中心地である碧海郡と、地形の共通性が認められる西加茂郡を事例に、瓦産地の地域的拡大という観点から両地域の関係を明らかにしようとした。

その結果、近代には西三河南部にあたる碧海郡の高浜町と新川町以外にも、名古屋市南区笠寺や豊橋市などでもさかんに瓦生産が行われ、碧海郡周辺以外にも瓦産地がみられたことが改めて浮上した。尾張地方でも瓦生産が行われていたが、一部を除けば生産よりも販売が目立っていた。愛知県内の市郡レベルで瓦生産の地域差をみると、燃料にはほとんど差異がないものの、碧海面で採掘される「三河土」や拳母面から得られる原土は質・量ともに評価が高かった。この地域のうち、現在の安城市域や平成合併前の豊田市域でも近代には瓦生産がさかんに行われていたが、産業構造の変化により衰退を余儀なくされた。

西加茂郡における大正時代の瓦生産額の伸びには、既刊の自治体史などで指摘されていた碧南や高浜から移住した瓦生産者が寄与した。また、両地域はダイレクトにつながるだけでなく、間に碧海郡依佐美村高棚が介在したケースがあることを明らかにし、碧海郡で青年期を過ごした男性のなかには、郡内の碧南・高浜や高棚で修業後、瓦職人兼農業開拓者として独立するために拳母町へ移住した者も存在した可能性を示唆した。

近代の西三河平野部では、瓦の原土の存在を基盤としながら、原料と労働力という資源が行き来していた。近代の西三河地域を象徴するものとして瓦があり、それが現代を象徴する自動車産業へ転換していったと考えられる。換言すれば、瓦という切り口から近代西三河地域の地域性をとらえることが可能であるといえるのである。

## 文献

愛知県西加茂郡教育会（1926）『西加茂郡誌』。

逢妻史跡研究会（2001）『あいづまの人物誌』。

近代における瓦産地の地域差と地域的拡大  
—愛知県碧海郡と西加茂郡の事例—

- 天野卓哉 (2015) 「粘土」『新修豊田市史 別編 民俗Ⅱ 平地のくらし』。
- 井上 要ほか (1927) 『日本瓦業総覧』日本瓦業総覧刊行会。
- 宇佐見正史 (2008) 「窯業と繊維業」『新編安城市史3 通史編 近代』。
- 小野映介 (2018) 「段丘群の地形・地質と形成過程」『新修豊田市史 別編 自然』。
- 北川博史 (2008) 「繊維工業から機械工業へ」『新編安城市史4 通史編 現代』。
- 記念誌編集委員会 (2009) 『深田山農事実行組合 八十年の歩み』。
- 小菅 廉ほか (1897) 『尾参宝鑑』。
- 杉浦茂治、高浜町誌編纂委員会 (1968) 『三州瓦のあゆみ』高浜町誌資料8。
- 高木秀和 (2019) 「高浜における現代の瓦産業の展開と地域社会」『「窯業のまち・たかはま」の産業風土とまちづくり 講演録』高浜市。
- 高木秀和 (2021) 「戦後以降の瓦産業」『市外からやって来た人々』『新編高浜市誌 高浜市のあゆみ』。
- 高浜市やきものの里かわら美術館 (2010) 『三州瓦と高浜いま・むかし』。
- 中部産業遺産研究会 (2000) 『産業考古学シリーズ5 ものづくり再発見 中部の産業遺産探訪』アグネ技術センター。
- 豊田市近代の産業とくらし発見館 (2017) 『とよたの製瓦業 いぶしの輝き』。
- 豊田市史編さん委員会 (1981) 「単一企業都市における町と村の工業」『豊田市史9 資料 現代』。
- 林口 宏、碧南市教育委員会 (2021) 『三河での瓦づくり伝承と歴史』碧南市史資料73。
- 宮川泰夫 (1977) 「加茂蚕糸の復興と近在必要工業の成立」『在来工業地域の変容と都市工業の確立』『豊田市史4 現代』。
- 宮川泰夫 (1995) 「風土文化の革新と三州瓦産地の変容」『比較社会文化』(九州大学大学院比較社会文化研究科) 1。
- 若子 旭 (2009) 「忘れ去られた地場産業 拳母の瓦」『研究紀要』(豊田市郷土史研究会) 8。

